

## 近世墓標・過去帳・系譜類にみる武家の家内秩序と「家」意識

著者	澁谷 悠子
雑誌名	東北文化研究室紀要
巻	52
ページ	21-48
発行年	2011-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/50620">http://hdl.handle.net/10097/50620</a>

## 近世墓標・過去帳・系譜類にみる武家の家内秩序と「家」意識

澁谷 悠子

### 先行研究と本論の課題

石製墓標の造立が庶民にまで普及したのは江戸時代中期以降といわれており、墓標には檀那寺から授与された戒名のほかに没年や俗名などが刻まれている。墓標と対になるものとして、檀那寺が年回忌供養のために作成した寺院過去帳がある。寺院過去帳には戒名など墓標に刻まれた情報に加え、施主と被供養者の関係性（「○○の娘」など）、居住地や享年、死因など檀家に関する詳細な情報が含まれていることが多い。墓標に祀られているのがどのような人物なのか知るためには、過去帳との照合が必須である。

無論、江戸時代に生きた全ての人が過去帳に記され、墓石を建てることができた訳ではない。檀那寺を持たない都市下層民などは、経済的理由や祭祀の主体である「家」の形成ができないことから、檀家の「頼」や「口入」によって寺院過去帳に記載されることがあっても、石製墓標は持たなかったとされている。また、飢饉や疫病流行などによる大量死に際し、個々に供養してくれる縁者を持たない死者は過去帳には記されず、飢饉供養塔や三界万霊塔などで一括供養されている。現在までに各地で行われてきた近世墓標の悉皆調査からも、墓標

の普及には地域差や身分・階層差があるということが明らかにされている。<sup>(4)</sup>

以上のことから、過去帳に記され、墓標を持つための条件として、墓標造立が可能な社会階層に所属し、一定程度の経済力を有していること、死後の供養を行ってくれる「家」を形成していることと、つまり安定的な生活基盤を有していることが不可欠であるといえる。そして、「家」の中で誰の墓標がどの順番で建てられていくようになるかというとはじめに当主個人を祀る墓石が建てられ、次に夫婦単位の墓、そして子供という順で墓標に祀られる対象が拡大していくという。<sup>(5)</sup>

このように、近世墓標の造立が浸透していく実態は明らかにされつつある。しかし、ある「家」の墓所で墓標造立が一定程度継続的にみられるようになった段階にあっても、「家」成員全ての墓が建てられていない場合が多いのではないだろうか。「家」成員のうちで誰が過去帳に記され、墓標を建ててもらえたのか、そしてそれらの対象から外れているのは誰なのかについて知るためには「家」成員を書き出した系譜類との照合が必要となる。だが、こうした基礎的な検討を行った研究は管見にして知らない。近年、墓標の個別的歴史性に着目しようとする潮流が生まれてきており、誰が供養の対象になるかという問

題も被供養者の個別の事情に大きく影響されると考えられるため、筆者もその立場から分析を行いたいと考える。なお、発掘調査の成果をもとにした將軍墓・大名墓研究では、対象となる墓標の数自体がそれほど多くないということもあり、個々の墓標（被葬者）に焦点をあてた分析が比較的行われやすい傾向がある。これらの研究では、墓標・埋葬施設の規模、副葬品の質・量、埋葬位置関係が被葬者の身分・階層と対応関係にあることが指摘されているものの、分析の組上にあげられているのはあくまでも墓標を持っていた少数の者に限定されている。

本論では、「家」成員を書き出した系譜類をもとに、誰が過去帳に記載され、墓標を建ててもらえたのか、対象にならなかった者はどのような特徴があるのかという、過去帳および近世墓標の史料論的アプローチを試みたい。なお、ここで取り上げるのは、系譜類と過去帳、近世墓標の三つの資料を用いた分析が可能な松前藩主松前家（以下、松前藩主家と略称）と、松前藩家老などを務めた重臣村上系松前家を対象とする。

## 一、分析対象と使用資料

具体的な分析に入る前に、分析対象となる松前の地域的特質および松前藩主家・村上系松前家の概要、使用資料の性格などについて述べてい。

本論は、蝦夷島の松前（福山）城下の寺院墓地（図1）に残された近世墓標と、過去帳など歴史人口関連史料の調査・分析を行った科学



図1 福山城下寺院街 寺院配置

研究費基盤研究B「近世墓と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究」のデータに基づく。調査成果の詳細については報告書を参照されたい。

松前は、明治以降、人口の流出が著しく、墓標の造立が低調であったため、大量の近世墓標がほぼ現位置を保ったまま良好な状態で残されている。また、今回取り上げる松前藩主家・村上系松前家の系譜類や寺院過去帳など、「家」成員の検討に要する史料も豊富に残されているという特質がある。

### (1) 松前藩主家の概要と資料

松前藩主家は、戦国期、蝦夷島南端の和人領主間の抗争を制した蠣崎(のち松前氏に改称)慶広を祖とする外様大名である。当家は、文化四年(一八〇七)から文政四年(一八二二)の陸奥国伊達郡梁川への移封期と、安政二年(一八五五)からの幕領期を除いて蝦夷地全域を支配していた。石高は、享保四年(一七一九)には一万石格、安政二年には三万石を有するに到った。

主な松前藩主家関係史料は、歴代当主・藩主や正室・継室・側室、子息女らの出自・来歴などを記した「松前家記附録共完」(「松前家記」と略称)、国元の菩提寺である曹洞宗大洞山法幢寺所蔵の「天保一三壬寅年八月御代々様御始御法名並御法会之節御取扱向」(「法幢寺松前藩主家過去帳」)、奥平家旧蔵の「松前家御過去帳写」を用いた。「法幢寺松前藩主家過去帳」の表題には「天保一三年」(一八四二)とあるが、寛正三年(一四六二)から嘉永六年(一八五三)までに亡くなった

た松前藩主家関係者が記載され、「松前家御過去帳写」には寛正三年から天保六年(一八三五)分までが記されている。「法幢寺松前藩主家過去帳」に比べ、「松前家御過去帳写」は記載年代の範囲がやや短いが、「法幢寺松前藩主家過去帳」には記されていない子息女三三名が含まれている。三三名のうち、分家後や養子先・嫁ぎ先で死亡した子息女は二五人であり、約八割にのぼる。「松前家御過去帳写」を用いてどのような供養行事がなされていたのか、また、分家・養子や婚姻後に亡くなった人物を含む過去帳が他の大名家でも作成されていたのか、現在のところ不明であるが、村上系松前家など松前の他の家ではみられない特徴であるといえる。ここでは、記載人数が多く、松前藩主家の特徴を表すと思われる「松前家御過去帳写」をもとに分析を進めたい。

松前藩主家は国元の法幢寺以外にも、江戸の吉祥寺、紀伊高野山に墓所があり、近世の年号を持つ墓標がまとまって残されている。この三ヶ所で墓標調査を行ったところ、吉祥寺では慶安元年(一六四八)から明治六年(一八七三)の年号を持つ一五基が確認できた。しかし、一五基全てが同一型式・石材であり、墓標裏面にはほぞ穴がみられたため、現存する墓標は後世に石製玉垣を転用して建てられたと推測される。よって、法幢寺と高野山に残る墓標のみを取り上げることとする。

法幢寺松前藩主家墓所には、中世に亡くなった人物も含め計六四人分五〇基の石製墓標が現存する。武田信広をはじめとする歴代当主や正室、子息女などを祀った中世の年号を持つ墓標、および六世盛広や

表1 松前藩主家・村上系松前家「家」成員の過去帳記載率・墓標保有率

	系譜類に記されている者			過去帳に記載されている者			墓標を持つ者		
	当主	当主の妻妾など	当主の子供	当主	当主の妻妾など	当主の子供	当主	当主の妻妾など	当主の子供
松前藩主家	11	42	80	11 (100%)	19 (45%)	52 (65%)	11 (100%)	11 (26%)	16 (20%)
村上系松前家	8	20	49	7 (88%)	3 (15%)	11 (22%)	5 (63%)	3 (15%)	8 (16%)

\*対象となるのは、松前藩主家は初代慶広以降、村上系松前家は3代広謀以降であり、後世に墓標が建てられている者や近代以降に死亡した者は除外した。  
 \*松前藩主家の過去帳記載者は「松前家御過去帳写」を用いて照合した。  
 \*なお、「法福寺松前藩主家過去帳」にみる過去帳記載率は当主・藩主11名(100%)、妻など18名(43%)、子息女は19名(24%)であった。

同正室、一二代崇広、一三代徳広の墓標は、死亡時期と墓標型式・石材から推定される造立時期の間にかんりのひらきがみられた。また、二代公広の正室や六代邦広の正室の墓標は、「松前家記」・過去帳における埋葬地の記載や墓地図面などから考えて、明治以降に再建された可能性が高い<sup>14)</sup>。後世に造立されたと考えられる墓標二二人分一〇基を除く、四二人四〇基を対象に分析を行う。

## (2) 村上系松前家の概要と資料

村上系松前家は、戦国期の和人領主間の抗争に敗れ、被官化した旧館主の系譜をひく。家老職などに就いて藩政に直接かわるようになるのは、松前藩主家から養子に入った四代当主広謀の代以降であり、この時に苗字を松前に改めている。その後、七代広行が切腹を命じられるが絶家にはならず、六代藩主邦広の四男広長を養子とし、村上系松前家は幕末まで存続する。

村上系松前家関係史料は「松前村上系譜」<sup>15)</sup>と、曹洞宗松前山法源寺所

蔵の過去帳「法源寺過去帳」<sup>16)</sup>を使用した。

当家の墓所は法源寺墓地に現存し、計一七人分一六基の墓標がある。そのうち、三代村上直儀の墓標は「明和五年戊子夏追諡建碑于松前山法源寺」と系譜にあることから、明和五年(一七六八)に建てられたことが明らかであるため、分析にはこれを除く一六人分一五基のデータを用いる。

## 二、松前藩主家における死者供養

ここでは、「松前家記」から復元できた松前藩主家の「家」成員のうち、誰が過去帳に記され、墓標を建ててもらえたのか、埋葬地と複数ある墓標造立地の関係や墓標の規模などにも触れつつ、当主・藩主や正室・側室・召使、子息女といった「家」内部における序列に着目して検討する。

### (1) 過去帳の記載率

まず、「松前家記」に記されていた者の過去帳記載率を検討したい。対象とするのは原則として初代藩主慶広以降の藩主・正室・子息女などとし、中世以前ないし近代以降に亡くなっている者、墓標が後世建てられている者は除外する。なお、没年不明の者は分析対象とした。

当主・藩主の過去帳記載率は二一名中二一名(一〇〇%)、正室などは四二名中一九名(四五%)、のちに当主・藩主となった者を除く子息女は八〇名中五二名(六五%)である(表1)。藩主・当主は全

表2 松前藩主家 当主・藩主など一覧

当主・藩主代数	名前	過去版記載の有無	墓標の有無	戒名	没年月日	父	生母	藩主在任期間	享年(歳)	埋葬地	備考
—	蠣崎季繁	○◎	●	院殿5居士	1462.0612	不明	不明	—			信広の義父、墓標は後世の造立
1世	武田信広	○◎	●	院殿5禪定門	1494.0520	武田信賢	不明		64	上ノ国夷王山	墓標は後世の造立
2世	蠣崎光広	○◎	●	法源寺殿5禪定門	1518.0712	蠣崎信広	蠣崎季繁の養女	—	62	法源寺	墓標は後世の造立
3世	蠣崎義広	○◎	●	法幢寺殿5居士	1545.0819	蠣崎光広	不明	—	67	法幢寺	墓標は後世の造立
4世	蠣崎季広	○◎	●	後法幢寺殿5居士	1595.0420	蠣崎義広	家臣磯内館主薦祖季直の孫	—	89	法幢寺	墓標は後世の造立
5世(初代)	松前慶広	○◎	●	院殿5居士	1616.1012	蠣崎季広	家臣箱館館主河野季通の女	1582—1616	69	法幢寺	松前にて死亡、墓標は後世の造立
6世	松前盛広	○◎	●	院殿5居士	1608.0121	松前慶広	家臣村上季儀の女	—	38	法幢寺	相模を幕府居出の前に死亡、松前にて死亡、墓標は後世の造立
7世(2代)	松前公広	○◎	○☆	院殿5居士	1641.0708	松前盛広	家臣下国直季の女	1617—1641	44	法幢寺	松前にて死亡
8世(3代)	松前氏広	○◎	○☆	院殿5居士	1648.0825	松前公広	公家人炊御門資賢の女	1641—1648	27	吉祥寺	江戸にて死亡
9世(4代)	松前高広	○◎	○☆	院殿5居士	1665.0705	松前氏広	家臣蠣崎友広の女	1648—1665	23	法幢寺	松前にて死亡
10世(5代)	松前矩広	○◎	○	院殿5居士	1720.1221	松前高広	家臣蠣崎利広の女	1665—1720	62	法幢寺	松前にて死亡
—	松前本広	◎	●	院殿5居士	1720.0423	幕臣松前直広	山形藩最上氏家臣草刈九郎右衛門の女	—	74	吉祥寺	幕臣(分家)、邦広の実父
11世(6代)	松前邦広	○◎	( )	院殿5居士	1743.0408	松前本広	幕臣杉原正忠の女	1721—1743	39	法幢寺	本広の6男、松前にて死亡
12世(7代)	松前資広	○◎	○	院殿5居士	1765.0319	松前邦広	家臣土橋武則の女	1743—1765	49	法幢寺	松前にて死亡
13世(8代)	松前道広	○◎	○	院殿5居士	1832.0620	松前資広	公家八條隆英の女	1743—1765	79	吉祥寺	江戸にて死亡カ
14世(9代)	松前章広	○◎	○	院殿5居士	1833.0925	松前道広	家臣下国季寿の養女	1792—1833	64	法幢寺	松前にて死亡
—	見広	○◎	○	院殿5居士	1827.0730	松前章広	秋野某の女	—	23		10代良広・11代昌広(母は側室)の父
15世(10代)	松前良広	○◎	○	院殿5居士	1839.0824	松前見広	家臣村山信敏の妹	1834—1839	17	吉祥寺	松前昌広の同母兄、父見広は9代章広の2男、江戸にて死亡カ
16世(11代)	松前昌広	○	○	院殿5居士	1853.0808	松前見広	家臣村山信敏の妹	1839—1849	28	法幢寺	松前良広の同母弟、父見広は9代章広の2男、松前にて死亡
17世	松前崇広		●	院殿5居士	1866.0426	松前章広	家臣笠原紋十郎の姉	1849—1866	38	法幢寺	松前にて死亡、石廟内の別石五輪塔は後世の造立
18世(13代)	松前徳広		●	—	1868.1129	松前昌広	家臣山崎十二の女	1866—1868	25	弘前長勝寺→法幢寺	弘前にて死亡、明治3年に改葬、神葬祭、墓標は後世の造立

\* 出典「松前家記」、『寛政重修諸家譜』、「法幢寺松前藩主家過去帳」、「松前家御過去帳写」など。  
\* 没年月日は墓標がある場合には墓標の記載を優先し、墓標がない場合は過去帳の記載に従った。  
\* 過去帳記載の有無欄で「○」は「法源寺松前藩主家過去帳」に記載があるもの、「◎」は「松前家御過去帳写」に記載があるものを示す。  
\* 墓標の有無欄で「○」は法幢寺に墓標があるもの、「●」は法幢寺に墓標があるが後世の造立と推定されるもの、「☆」は高野山に墓標があるものを示す。

近世墓標・過去帳・系譜類にみる武家の家内秩序と「家」意識

表3 松前藩主家 正室・側室など一覧(1)

配偶者	立場	過去帳記載の有無	墓標の有無	戒名	没年月日	出自	産んだ子供の数	享年(歳)	埋葬地	備考
1 世信広	正室	○◎	●	院殿 4 人姉	1494.0520	蠣崎氏 安東政季の長女、蠣崎季繁の養女となる	1 男 1 女		上ノ国	墓標は後世の造立
2 世光広	正室	○◎	●	院殿 4 大姉	1518.0708	某氏 上ノ国の某氏の女	2 男 1 女		松前	墓標は後世の造立
3 世義広	正室	○◎	●	院殿 4 大姉	1545.0908	薦埴氏 穂内館主薦埴直季の孫	1 男 1 女		松前	墓標は後世の造立
4 世季広	正室	○◎	●	院殿 4 大姉	1601.1121	河野氏 宇須岸館主河野季通の女	3 男 3 女	92	法幢寺	墓標は後世の造立
	側室					某氏	3 男			
	側室					某氏	2 男 1 女			
	側室					某氏	2 男			
	側室					某氏	1 男			
	側室					某氏	1 男			
	側室					某氏	1 男			
	側室					某氏	3 女			
	側室					某氏	2 女			
初代慶広	正室	○◎	●	院殿 4 人姉	1584.0726	村上氏 人館館主村上季儀の女	2 男 1 女		法幢寺	墓標は後世の造立 * 6 世盛広の生母
	継室					齋藤氏 出羽山利郡の豪族齋藤実繁の女	4 男			
	側室					某氏	1 男			
	側室					某氏	1 男			
	側室					某氏	1 男			
6 世盛広	正室	○◎	●☆	院殿 4 大姉	1636.1125	下国氏 家臣下国直季の女	1 男		法幢寺 宗門寺	埋葬地は「松前家記」では法幢寺、「松前家御過去帳写」では宗門寺、墓標は後世の造立 * 2 代公広の生母
2 代公広	正室	○◎	●	院殿 4 人姉	1626.0824	大炊御門氏 公家大炊御門資賢の女	2 男 1 女		龍雲院	龍雲院を建ててのちに龍雲院から墓標を移す 墓標は後世の造立 * 3 代氏広の生母
	継室	○◎	○	院殿 4 大姉	1657.0413	蠣崎氏(藤) 家臣蠣崎守広の女	3 男 4 女		法幢寺	側室から継室へ
3 代氏広	正室	○◎	○☆	院殿 4 大姉	1696.0908	蠣崎氏 家臣蠣崎友広の女	1 男 1 女		法幢寺	* 4 代高広の生母
4 代高広	正室	○◎	○☆	院殿 4 大姉	1665.0611	蠣崎氏 家臣蠣崎利広の女	3 男 1 女		法幢寺	* 5 代矩広の生母
5 代矩広	正室	○◎	○	院殿 4 大姉	1678.0718	唐橋氏 公家唐橋在庸(半家(旧家・外様) 182石)の女	子供なし		法幢寺	
	側室	○◎		院殿 6 大姉	1740.0409	北川氏(主) 家臣北川正氏の女	3 男 4 女	72	光善寺	
	継室	○◎	○	院殿 4 大姉	1746.0427	米津氏(安) 幕臣米津才兵衛の女	子供なし	82	法幢寺	
本広	妻	◎		院殿 6 大姉	1724.0418	杉原氏 幕臣杉原忠兵衛の女	不明			幕臣松前本広の妻 * 6 代邦広の生母
6 代邦広	正室	○◎	●	院殿 6 大姉	1720.0712	高野氏(房) 公家高野侯光(羽林家(新家) 150石)の女	子供なし	21	光善寺	のちに光善寺から墓標を移す 墓標は後世の造立 矩広の世子富広に嫁ぐが、富広死去のため、邦広に嫁ぐ
	継室	○◎		院殿 2 社 7 禪定尼	1763.1015	土橋氏(左尾) 家臣土橋武則の女	5 男 3 女	62	光善寺	出家の後、妙蓮社を建てる * 7 代資広の生母側室から継室へ
	側室					某氏(民)	2 女			
	側室					某氏(勝)	1 女			
7 代資広	正室	○◎	○	院殿 4 大姉	1754.0127	八條氏(辨) 公家八條隆英(羽林家 150石)の女	1 男		法幢寺	* 8 代道広の生母
	側室	○◎	○	院殿 4 比丘尼	1801.0725	長倉氏(勘) 家臣長倉貞義の女	4 男 1 女	66	法幢寺 郭外	晩年出家する
	側室					某氏(梅)	1 女			
	側室					某氏(為)	1 女			
	側室					某氏(万)	1 男			
8 代道広	正室	○◎	○	院殿 4 大姉	1776.0515	花山院氏(敬) 公家花山院常雅(精華家 700石余)の女	1 男		法幢寺	
	側室	○◎		院殿 2 大姉	1781.0204	下国氏 家臣平田忠兵衛の女、家臣下国季寿の養女となる	2 男 3 女	27	光善寺	* 9 代章広の生母
	側室					某氏	1 男			
	側室					某氏(其)	1 男			
	召使	○◎	○	院 4 大姉	1803.0625	不明	不明		法幢寺 郭外	
	側室	○◎		院 4 大姉	1823.0326	林光氏(勢) 武藏・向宗林光寺住職某の女	1 女		林光寺	
	側室					藤倉氏(里) 家臣藤倉義喬の女	1 男 2 女			
	側室					某氏	1 男			
9 代章広	側室	○◎		院殿 4 大姉	1827.0608	蠣崎氏(霞) 家臣蠣崎広晃の女	1 男 1 女		吉祥寺	
	側室	○◎	○	院殿 4 大姉	1808.1211	秋野氏(晋)	1 男 2 女		吉祥寺	* 兄広の生母
	召使	○◎		院 6 大姉	1829.0925	不明	不明		光善寺	

表 3 松前藩主家 正室・側室など一覧（2）

配偶者	立場	過去帳記載の有無	墓標の有無	戒名	没年月日	出自	産んだ子供の数	享年(歳)	埋葬地	備考
9代崇広	側室					某氏	1男2女			
	側室					某氏(成)	2男2女			
	側室					笠島氏(歌)	家臣笠島紋十郎の姉	1男		*12代崇広の生母
見広	側室	○◎	○	院殿4比丘尼	1836.0703	村山氏(左様)	家臣村山信敏の妹	2男		見広の死亡後、出家 *10代良広・11代昌広の生母
11代昌広	側室	○		院殿4大姉	1850.0213	山崎氏(静)	家臣山崎十三の女	1男	吉祥寺	*13代徳広生母
	側室					某氏		1男		
12代崇広	正室					相馬氏(雄)	相馬充胤(相馬中村藩 6万石)の妹	子供なし		
	側室					某氏		1男2女		
	側室					某氏		1男2女		
	側室					某氏		1女		
13代徳広	正室					内藤氏(寿)	内藤正誠(岩村田藩 1万6000石)の伯母	2男		

\* 出典「松前家記」、「寛政重修諸家譜」、「法幢寺松前藩主家過去帳」、「松前家御過去帳写」など。  
 \* 没年月日は墓標がある場合には墓標の記載を優先し、墓標がない場合は過去帳の記載に従った。  
 \* 過去帳記載の有無欄で「○」は「法源寺松前藩主家過去帳」に記載があるもの、「◎」は「松前家御過去帳写」に記載があるものを示す。  
 \* 墓標の有無欄で「○」は法幢寺に墓標があるもの、「●」は法幢寺に墓標があるが後世の造立と推定されるもの、「☆」は高野山に墓標があるものを示す。  
 \* 結婚前に死去した事例は除外した。



表4 松前藩主家 子息女一覧(1)

父	名前	過去帳記載の有無	墓標の有無	戒名	没年月日	生母	来歴・婚姻など	享年(歳)	埋葬地	備考
1世信広	女					正室蠣崎氏	大館カ館主下国恒季に嫁ぐ			
	光広	○◎	●	法源寺殿5 禅定門	1518.0712	正室蠣崎氏	家を継ぐ(2世)	62	法源寺	墓標は後世の造立
2世光広	女					正室某氏		夭逝		
	義広	○◎	●	法幢寺殿5 庵主	1545.0819	正室某氏	家を継ぐ(3世)	67	法幢寺	墓標は後世の造立
	高広				1521.0330	正室某氏	観音寺館カ・花沢館カの館主となる、のち剃髪	40		
3世義広	季広	○◎	●	後法幢寺5 居士	1595.0420	正室薦堀氏	家を継ぐ(4世)	89	法幢寺	墓標は後世の造立
	女					正室薦堀氏	家臣明石季衡に嫁ぐ			
4世季広	舜広	○◎	●	院殿4 居士	1561.0420	正室河野氏		23		墓標は後世の造立
	元広				1562.0000	正室河野氏	家臣明石季衡の嗣子となる	23		
	慶広	○◎	●	院殿5 居士	1616.1012	正室河野氏	初代藩主となる	69	法幢寺	墓標は後世の造立
	女					側室某氏	脇本館主南条広継に嫁ぐ			
	女					正室河野氏	家臣下国師季に嫁ぐ			
	女					正室河野氏	津軽北郡の豪族喜庭季信に嫁ぐ			
	随良					側室某氏	法源寺住持となる			
	正広				1586.0000	側室某氏	病死、子は家臣となる	30		
	長広				0.0817	側室某氏	子は家臣となる			
	定広					側室某氏	家臣となる			
	包広					側室某氏		夭逝		
	吉広				1645.0511	側室某氏	子は家臣となる			江戸で死亡
	仲広	○◎	●	院殿4 居士	1581.0306	側室某氏	討ち死	21		墓標は後世の造立
	守広	◎		寿養寺院4 居士	1635.0206	側室某氏	焼死、子は家臣となる			
	昌広					側室某氏	子は家臣となる			
	貞広	◎		4 庵主	1635.1024	側室某氏	子は家臣となる			
	女					側室某氏	家臣小平季遠に嫁ぐ			
	女					側室某氏	家臣厚谷季貞に嫁ぐ			
	女					側室某氏	秋田湯河の豪族浅茂季に嫁ぐ			
	女					側室某氏	家臣村上忠儀に嫁ぐ			
	女					側室某氏	秋田の豪族神浦季綱に嫁ぐ			
	女					側室某氏	家臣下国師季の継室となる			
初代慶広	盛広	○◎	●	院殿5 居士	1608.0121	正室村上氏	家を継ぐが、幕府届出前に死去	38	法幢寺	墓標は後世の造立
	女					正室村上氏	はじめ津軽の喜庭直信に嫁し、津軽信建(弘前藩初代藩主津軽為信の長男)に再嫁			
	忠広	◎		5 居士	1617.0729	正室村上氏	幕臣となる(分家、1500石)	38		
	利広					側室	出奔			
	山広	◎		院殿	1614.1226	継室齋藤氏	豊臣秀頼と通じようとしたため、慶広らに謀殺される	21		知内村の雷天荒神社に祀られる
	次広	○◎	●	院殿4 居士	1606.0229	継室齋藤氏	前田利長(金沢藩、119万石)の嗣子となるが、加賀へ出立前に抱擁のため病死	11		墓標は後世の造立
	休之					継室齋藤氏	専念寺住職となる			
	景広	◎		院4 庵主	1658.0118	継室齋藤氏	河野季通の嗣子となる			
	安広	◎		院殿4 居士	1668.0708	側室	伊達政宗(仙台藩、62万石)に1200石で召し抱えられる、仙台藩上片倉重長(1万7350石)の女を娶る			
	満広	○◎	●	院殿4 居士	1624.0719	側室		18		墓標は後世の造立
6世盛広	女					側室	家臣下国広季に嫁す			
	公広	○◎	○☆	院殿5 居士	1641.0708	正室下国氏	2代藩主となる			
	兼広	○◎	●	院殿5 童子	1624.0624	正室大炊御門氏		10	法幢寺	墓標は後世の造立
	女	◎		院4 大師	1676.0929	正室大炊御門氏	家臣松前広雄に嫁す			
	氏広	○◎	○☆	院殿5 居士	1648.0825	正室大炊御門氏	3代藩主となる			
	泰広	◎		院殿4 居士	1680.0924	継室蠣崎氏	幕臣となる(分家、2000石)	53		
	広謀	◎		院4 居士	1678.0900	継室蠣崎氏	家臣村上直儀の後を継ぐ、松前氏を名乗る、弟の幸広と争い殺害される	50		
	幸広	◎		院4 居士	1678.0900	継室蠣崎氏	家臣齋藤直政の後を継ぐ、松前氏を名乗る、兄を殺害の後、自害する			
	女	◎		院4 大師	1652.0712	継室蠣崎氏	家臣蠣崎清広に嫁す			
	女	◎		院4 大師	1648.0803	継室蠣崎氏	家臣新井田成政に嫁す			
	女					継室蠣崎氏		夭逝		
	女	◎		院4 大師	1677.0813	継室蠣崎氏	家臣蠣崎広林に嫁す			

表4 松前藩主家 子息女一覧(2)

父	名前	過去帳 記載の 有無	墓標の 有無	戒名	没年月日	生母	来歴・婚姻など	享年 (歳)	埋葬地	備考
3代氏広	高広	○◎	○☆	院殿5居士	1665.0705	継室蠣崎氏	4代藩主となる			
	女	◎		院4大姉	1683.1012	継室蠣崎氏	家臣松前広守に嫁す			
4代高広	矩広	○◎	○	院殿5居士	1720.1221	正室蠣崎氏	5代藩主となる			
	忠広	○◎	○	院殿5居士	1700.0621	正室蠣崎氏	長じた後に伊沢を名乗る、分家カ	40	法幢寺	
	弥六郎	○◎	○	4童子	1665.1020	正室蠣崎氏		2	法幢寺	
	女(仙)	◎	○	院殿4大姉	1713.0729	正室蠣崎氏	幕臣松前当広(分家、1000石)に嫁す			
5代矩広	女(冬)	◎		院殿6大姉	1709.0118	側室北川氏	幕臣福島正森に嫁す	22		
	周広	○◎	○	院殿4居士	1704.0807	側室北川氏		17	法幢寺	
	女(伊良)	○◎		院殿6大姉	1708.1115	側室北川氏	幕臣山田八郎右衛門に嫁す	16	江戸専光寺	
	女(左知)	○◎		院殿5童女	1698.0322	側室北川氏		4	光善寺	
	富広	○◎	○	院殿5居士	1716.0113	側室北川氏	公家高野保光(羽林家(新家)、150石)の女を娶る	20	吉祥寺	江戸にて死亡
	方広	○◎	○	院殿5童子	1703.1115	側室北川氏		3	法幢寺	
	女(幾)	○◎		院殿5童子	1712.1214	側室北川氏		5	光善寺	
6代邦広	賢広	○◎	○	院殿5居士	1765.0319	継室上橋氏	7代藩主となる			
	女(道)	◎		院殿4大姉	1794.0917	側室	公家高野保吉(羽林家(新家)、150石)に嫁す	66		
	女	○◎	○	5童女	1731.0409	側室		夭逝		
	後則	◎		院殿10居士	1816.0603	継室上橋氏	柳生俊峰(柳生藩、1万石)の嗣子となる	85		
	広保	○◎	○	院殿5居士	1756.0619	継室上橋氏	兄寛広の仮嫡子となるが死去	24	法幢寺	
	女(斐斗)	◎		院殿6大姉	1753.0816	継室上橋氏	家臣蠣崎広重に嫁す	20		
	喜四郎	○◎	○	院殿5童子	1740.0511	継室上橋氏		6	法幢寺	
	女(高)	○◎		院殿6大姉	1765.0209	継室上橋氏	家臣蠣崎広重の後室となるが、離縁		光善寺	
	広長	◎		院4居士	1801.0510	継室上橋氏	家臣松前広行の嗣子となる	65		
	女(奴下)				1827.0803	継室上橋氏	はじめ家臣下国季降に嫁し、家臣藤倉義伯に再嫁			
7代寛広	女(利和)				1745.0707	側室	家臣高橋光隆の養女となる	4		
	道広	○◎	○	院殿5居士	1832.0620	正室八條氏	8代藩主となる			
	女(照)	◎		院殿4大姉	1811.0726	側室	幕臣松前等広(1000石)に嫁す	50		晩年に出家
	頼寛				1837.0810	側室長倉氏	幕臣池田織部の嗣子となる			
	武広				1833.1018	側室長倉氏	摂家一条氏の家臣難波某の嗣子となる			
	女(秀)	◎		院4大姉	1783.1105	側室	家臣蠣崎広命に嫁す	23		
	広晃				1848.0518	側室長倉氏	家臣蠣崎広寅の嗣子となる	85		
	広年				1826.0522	側室長倉氏	家臣蠣崎広武の嗣子となる	63		
	女(王)					側室長倉氏	はじめ家臣松前広曲に嫁し、家臣横井主賢に再嫁			
	信直	◎		院4居士	1792.1023	側室	家臣吉田信村の嗣子となる	20		
8代道広	章広	○◎	○	院殿5居士	1833.0925	側室下国氏	9代藩主となる			
	智広	○◎	○	5童子	1776.0403	正室花山院氏		夭逝		
	広国	◎			1803.0603	正室花山院氏	家臣蠣崎広命の嗣子となる	27		
	女(竹)	◎		院6大姉	1803.0707	正室花山院氏	家臣藤倉保春に嫁す	25		増子と双子
	女(増)	◎		院4大姉	1803.0621	正室花山院氏	家臣小林良明に嫁す	25		竹子と双子
	女	○◎	○	3童女	1781.0128	正室花山院氏		夭逝	法幢寺	
	広秀				1784.0701	側室		62		
	広純					側室	家臣松前広政の嗣子となる			
	幸之助	○◎	○	4童子	1796.0802	側室藤倉氏		夭逝	法幢寺	
	連之助				1797.0329	側室	家臣北見政富の嗣子となる	夭逝	法幢寺	
	女(澄)	○◎		院殿5童女	1808.0621	側室藤倉氏		夭逝	吉祥寺	江戸で死亡
	女(岩)	○◎		院殿5童女	1804.1010	側室林光氏		夭逝	吉祥寺	江戸で死亡
9代章広	女(琴)	○◎		4童女	1803.0603	側室藤倉氏		夭逝	吉祥寺	江戸で死亡
	慶之助(市之助)	○◎	○	院殿5童子	1803.0611	側室蠣崎氏	嗣子となるが死去	10	法幢寺	
	女(梁)				1832.0824	側室蠣崎氏	公家高野保吉(羽林家(新家)、150石)に嫁す	33		
	女(歌)	◎		院	1828.1008	側室	家臣蠣崎広得に嫁す	28		
	見広	○◎	○	院殿5居士	1827.0730	側室		23		10代良広・11代昌広(母は側室)の父
	女(友)				1837.0212	不明	井上正春の妹、章広の養女となり幕臣高井清章に嫁す	23		見広正室になる予定であったが、見広死去のため章広養女となり他家に嫁ぐ
	久之助	◎		院殿5童子	1811.0518	側室		7	吉祥寺	江戸で死亡
	女(伊勢)				1845.0123	側室	幕臣松平定史に嫁す	38		

表 4 松前藩主家 子息女一覧（3）

父	名前	過去帳記載の有無	墓標の有無	戒 名	没年月日	生母	来歴・婚姻など	享年(歳)	埋葬地	備考
9代章広	女(初)					側室	家臣松前広重に嫁す			
	女(則)	◎		3 童女	1811.0212	側室		夭逝	吉祥寺	江戸で死亡
	女(成)	◎		5 童女	1812.1215	側室		夭逝	興国寺	梁川で死亡、興国寺に墓標あり
	女(幸)	◎		院殿 4 大姉	1829.0129	側室		16	吉祥寺	江戸で死亡
	重広	◎	○	院殿 4 居士	1832.0428	側室		18	法幢寺	
	広経				1848.0824	側室	家臣松前広房の嗣子となる	27		
	崇広		●	院殿 5 居士	1866.0426	側室寺島氏	12代藩主となる			
11代昌広	徳広		●	院殿 5 居士	1868.1129	側室山崎氏	13代藩主となる			墓標は後世の造立
	縄之助				1847.0320	側室		2	吉祥寺	江戸で死亡
12代崇広	女(武)				1874.0123	側室	はじめ足利利繩に嫁し、戸田忠行(宇都宮藩、1万1000石)に再嫁	20		
	梯之丞		○		1851.0516	側室		夭逝	法幢寺	
	女(茂)		○		1853.0428	側室		夭逝	法幢寺	
	隆広					側室				
	女(邦)					側室	公家清水谷公考(羽林家(旧家)、200石)に嫁す			
	女(増)					側室				
	女(鋭)				1868.1120	側室		2	平館福牛院→法幢寺	船中にて死亡、津軽平館に仮埋葬ののち法幢寺に改葬
13代徳広	修広			不明	1871.0714	正室内藤氏	14代藩主となる			
	敬広				1873.1120	正室内藤氏		夭逝	吉祥寺	

\* 出典「松前家記」、「寛政重修諸家譜」、「法幢寺松前藩主家過去帳」、「松前家御過去帳写」など。  
\* 没年月日は墓標がある場合には墓標の記載を優先し、墓標がない場合は過去帳の記載に従った。  
\* 過去帳記載の有無欄で「○」は「法源寺松前藩主家過去帳」に記載があるもの、「◎」は「松前家御過去帳写」に記載があるものを示す。  
\* 墓標の有無欄で「○」は法幢寺に墓標があるもの、「●」は法幢寺に墓標があるが後世の造立と推定されるもの、「☆」は高野山に墓標があるものを示す。

表5-1 法幢寺松前藩主家墓所の墓標と被供養者(1)

墓標 番号	全高 (cm)	型 式	成 名	没年	名 前	「家」内部での立場など	備 考
松1	(150)	別石五輪塔	院殿5居士	1616	松前慶広	初代藩主	後世の造立
松2	158	櫛形	院殿5居士	1462	蠣崎季繁	1世父(武田信広義父)	埋葬地:不明、松2は後世の造立
			院殿4大姉	1494	蠣崎氏	1世正室	埋葬地:上ノ国
			院殿4大姉	1518	某氏	2世正室	埋葬地:松前
			院殿4大姉	1545	鷹紐氏	3世正室(4世生母)	埋葬地:松前
			院殿4大姉	1601	河野氏	4世正室(初代生母)	
			院殿4大姉	1584	村上氏	初代正室(6世母)、2男1女を産む	
松3	216	笠塔婆	院殿5童子	1624	松前兼広	2代長男、享年10歳	
			院殿5禪定門	1494	武田信広	1世	埋葬地:上ノ国夷土山、松3は後世の造立
			法源寺殿5禪定門	1518	蠣崎光広	2世	埋葬地:法源寺
			法幢寺殿5庵主	1545	蠣崎義広	3世	
			後法幢寺殿5居士	1595	蠣崎季広	4世	
松4	170	笠塔婆	院殿4居士	1720	松前本広	6代父	埋葬地:江戸吉祥寺
松5	153	笠塔婆	院殿4居士	1561	蠣崎舜広	4世長男	埋葬地:不明、松4は後世の造立
			院殿4居士	1581	蠣崎仲広	4世10男、討ち死	埋葬地:不明、松5は後世の造立
			院殿4居士	1606	松前次広	初代5男、享年11歳	埋葬地:不明
松6	107	一石五輪塔+石廟	院殿4居士	1624	松前満広	初代8男、享年18歳	埋葬地:不明
			院殿4大姉	1665	蠣崎氏	4代正室(5代生母)、3男1女を産む	
松7	118	一石五輪塔+石廟	院殿5居士	1720	松前矩広	5代	
松8	135	別石五輪塔+石廟	院殿4大姉	1696	蠣崎氏	3代正室(4代生母)、1男1女を産む	
松9	(153)	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1665	松前高広	4代、享年23歳	
松10	161	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1648	松前氏広	3代、享年28歳	埋葬地:江戸吉祥寺
松11	169	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1641	松前公広	2代	
松12	94	一石五輪塔+石廟	院殿4大姉	1657	蠣崎氏	2代継室、3男4女を産む	
松13	186		院殿4大姉	1678	唐橋氏	5代正室、子供なし	
松14	200	別石五輪塔		1716	松前富広	5代2男、享年20歳	埋葬地:江戸吉祥寺
松15	122	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1743	松前邦広	6代	
松16	101	一石五輪塔+石廟	院殿4大姉	1746	米津氏	5代継室、子供なし、享年82歳	
松17	118	別石五輪塔+石廟	院殿4大姉	1754	八条氏	7代正室(8代生母)、1男を産む	昭和28年の修理に際して下部施設調査(土葬石室木炭櫛木棺、副葬品:銭・枚と金襴織子)
松18	171	別石五輪塔	院殿5居士	1700	松前忠広	4代2男、分家カ、享年40歳	
松19	163	別石五輪塔	院殿4大姉	1713	女(仙)	4代長女、幕臣松前当広に嫁す	埋葬地:不明
松20	136	笠塔婆	院殿5居士	1756	松前広保	6代3男、享年24歳	
松21	122	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1765	松前資広	7代	
松22	133	別石五輪塔+石廟	院殿4大姉	1776	花山院氏	8代正室、1男を産む	
松23	不明	別石五輪塔	5童子	1776	松前智広	8代2男、夭逝	埋葬地:不明、昭和50年代に行われた松前町の調査で確認されているが、2007年度調査では発見できなかった
松24	130	別石五輪塔	院殿5童子	1740	松前喜四郎	6代4男、享年6歳	
松25	(146)	別石五輪塔	院殿4居士	1704	松前園広	5代長男、享年17歳	
松26	(118)	別石五輪塔	院殿6童子	1703	松前方広	5代3男、享年3歳	
松27	(124)	別石五輪塔	5童女	1853	女(茂)	12代2女、夭逝	
松28	297	不定形	記載無し	1868	松前徳広	13代	埋葬地:弘前長勝寺一法幢寺、後世の造立、松前家墓地碑銘調査には「木牌ニテ木造ノ堂宇ニアリテ堂宇破損セリ」とあり
松29	135	尖頭角柱	院殿4大姉	1626	大炊御門氏	2代正室(3代生母)、2男1女を産む	埋葬地:龍雲院、のちに龍雲院から墓標を移す、後世の造立、松前家記では1617年没
松30	133	尖頭角柱	院殿6大姉	1720	高野氏	5代2男富広正室、のち6代正室、子供なし、享年21歳	埋葬地:光善寺、のちに光善寺から墓標を移す、後世の造立
松31	130	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1866	松前崇広	12代	「松前家墓地碑銘調査」には「大ナル木牌ニテ石室ノ中ニ安置ス」とあり、別石五輪塔は後世の造立
松32	(123)	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1853	松前昌広	11代	
松33	(119)	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1833	松前章広	9代	
松34	112	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1832	松前道広	8代	埋葬地:江戸吉祥寺
松35	161	笠塔婆	院殿5童子	1803	松前市之助	9代長男、享年10歳	
松36	(78)	不明	※(位号不明)		不明		崩れていた
松37	137	別石五輪塔	5童子	1851	松前徳之丞	12代長男、夭逝	
松38	151	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1608	松前盛広	6世	後世の造立、埋葬地:松前宗円寺
松39	145	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1827	松前見広	9代2男、享年23歳	埋葬地:不明
松40	149	別石五輪塔+石廟	院殿5居士	1839	松前良広	10代	埋葬地:江戸吉祥寺
松41	158	笠塔婆	院殿4居士	1832	松前重広	9代4男、享年18歳	
松42	130	別石五輪塔+石廟	院殿4大姉	1808	秋野氏	9代側室(見広母)、1男2女を産む	埋葬地:江戸吉祥寺
松43	104	櫛形	院殿4比丘尼	1801	長倉氏	7代側室、4男1女を産む、享年66歳	埋葬地:松前法幢寺郭外

表 5－1 法幢寺松前藩主家墓所の墓標と被供養者（2）

墓標番号	全高(cm)	型 式	戒 名	没年	名 前	「家」内部での立場など	備 考
松44	156	笠塔婆	3 童女	1781	女	8 代 3 女、夭逝	
			4 童子	1796	松前幸之助	8 代 6 男、夭逝	
松45	155	笠塔婆	4 童子	1665	松前弥六郎	4 代 3 男、享年 2 歳	
			5 童女	1731	女	6 代 2 女、夭逝	埋葬地：不明
松46	135	別石五輪塔＋石廟	院殿 4 比丘尼	1836	村山氏	9 代 2 男見広備室（10代・11代生母）、 2 男を産む	埋葬地：不明
松47	76	別石五輪塔＋石廟	記載無し	-	不明		
松48	160	宝塔形＋石廟	院殿 4 大姉	1636	下国氏	6 世正室（2 代生母）	後世の造立、埋葬地：法幢寺（「松前家記」）／奈門寺（「松前家御過去帳写」）
松49	117	別石五輪塔	6 居士	1656	不明		
松50	93	櫛形	院 4 大姉	1803	不明	8 代召使	埋葬地：松前法幢寺郭外

\* 埋葬地について特に記載がないものはすべて法幢寺に埋葬されたことを示す。  
\* 参考史料は「松前家記」、「寛政重修諸家譜」、「法幢寺松前藩主家過去帳」、「松前家御過去帳写」などである。  
\* 全高の欄は、石廟内に別石五輪塔などが納められている場合、内部の墓標計測値を記載した。  
\* 全高の（ ）は上部欠失や残欠など残存部分の計測値を示している。

表 5－2 高野山奥の院における松前藩主家墓所の墓標と被供養者

墓標番号	全高(cm)	型式	戒名(略)	没年	名前	「家」内部での立場など	備 考
高野 1	(100)	別石五輪塔	4 大姉	(1636)	下国氏	6 世正室（2 代生母）	
高野 2	(107)	別石五輪塔	5 居士	(1641)	松前公広	2 代	
高野 3	(184)	別石五輪塔	5 居士	1648	松前氏広	3 代	埋葬地：江戸吉祥寺、墓標造立は1659年
高野 4	175	別石五輪塔	院殿 4 大姉	1665	蠣崎氏	4 代正室（5 代生母）	
高野 5	(153)	別石五輪塔	院殿 4	1665	松前高広	4 代	
高野 6	122	櫛形	院殿 4 大姉	1696	蠣崎氏	3 代正室（4 代生母）	

\* 埋葬地について特に記載がないものはすべて法幢寺に埋葬されたことを示す。  
\* 参考史料は「松前家記」、「寛政重修諸家譜」、「法幢寺松前藩主家過去帳」、「松前家御過去帳写」などである。  
\* 全高の（ ）は上部欠失や残欠など残存部分の計測値を示している。

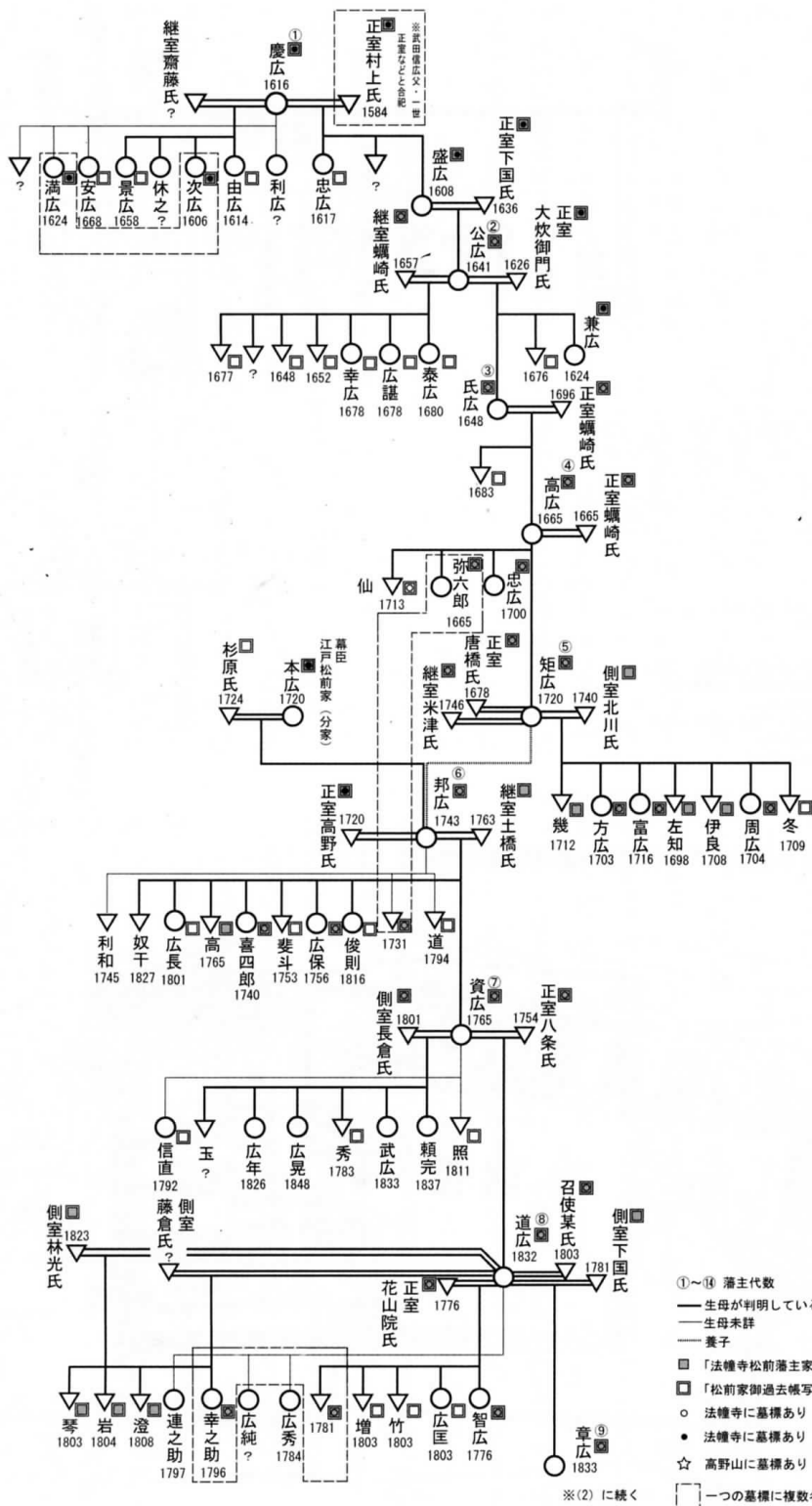


図2 松前藩主家系図にみる過去帳・墓標祭祀の対象者（1）



員が過去帳に記されていたが(表2)、正室などと子息女は過去帳記載率が約七割から約五割とやや低い。過去帳に記されていない者をみると、当主・藩主の生母ではない側室が二三名中二〇名(八七%)、生母が側室である子息女は二八名中二二名(七九%)であり、それぞれ大半を占めている(表3・4)。基本的に過去帳に記されるのは、当主・藩主、正室・継室や藩主生母となった側室であり、子息女は前述のように分家・養子後や嫁いだ後に亡くなった者も含め、正室ないし継室を生母とする者が多数記されている。なお、子息女のうち、童子・童女など子供の戒名を持つ者が過去帳に記されるようになるのは、男児の場合は一七世紀前半、女児の場合は一七世紀末以降であり、記載が始まる時期に時間差がみられた。

## (2) 墓標を持つ者の特徴

### ① 法幢寺に墓標を有する者

続いて、法幢寺松前藩主家墓所に墓標を有する者についてみていく。当墓所では藩主全員の墓が確認でき(表5・1・図2)、二代公広から石廟内に小型の墓標を納める型式が採用されている。墓標の配置状況をみると、斜面に作られた狭い平場に後世に一括して建てられた武田信広や初代藩主慶広の墓標が並べられ(Ⅰ区)、斜面下方の平場には二代藩主・正室らの石廟が置かれ(Ⅱ区)、東側の雑壇状の平場に墓標が配置されている(Ⅲ区)(図3)。各区のおおまかな形成時期は、Ⅰ区が一七二〇年代以降、Ⅱ区が一六四〇年代から一八三〇年代、一時中断をはさんで一八五〇年代から一八六〇年代、Ⅲ区は一八

四〇年代以降であると考えられる。家の始祖ともいべき人物の墓標を墓域の奥まった場所の中央に据え、その両側に歴代の当主・正室らの墓標を「コ」字状に墓標を並べていき、さらに左右両側の列がいっぱいになると、今度は手前に墓標を建てていくのは、松前藩主家に限らず、村上系松前家などの重臣層の墓域にも共通してみられる現象である。「松前家記」や『寛政重修諸家譜』から死亡地・埋葬地と墓標造立地の関係をみると、松前で亡くなった者に限らず、江戸で死亡して埋葬されている三代氏広や八代道広、一〇代良広も松前の法幢寺に墓標を持つことになる。

当主・藩主の正室などのうち、法幢寺に埋葬され墓標を持つ者は一名(二六%)である。法幢寺に墓標を持つのは正室や継室、藩主生母となった側室に多くみられ、石廟内に小型の五輪塔を納めるものや大型の別石五輪塔が用いられている。埋葬地と墓標造立地の関係は、当主・藩主とは異なり、高野山に墓標を持つ者を除いて、原則として埋葬地にのみ墓標が建てられている。ただし、正室や継室であっても、二代公広の正室や六代邦広の継室は法幢寺以外に埋葬されている。二代正室は龍雲院、六代継室は妙蓮社の創建に関わっており、その経緯から龍雲院墓地や妙蓮社の本寺である光善寺の墓地に埋葬されたものと考えられる。正室・継室、藩主生母以外で法幢寺に埋葬され墓標を持つのは、七代資広の側室と八代道広の召使である。この二名は埋葬地が「法幢寺郭外」とされていること、正室らの墓標は石廟や別石五輪塔が採用されているのに対し、櫛形が用いられていることから、法幢寺に埋葬されているものの、正室らと比較して軽い取り扱いを受け



ているといえよう。当主・藩主の正室などの埋葬地や墓標造立地の選定には、正室・側室といった大名家の妻としての立場・序列や藩主生母になりえたかという要因に加え、個々人の意向（自らが創建に関わった寺庵に葬られる）が反映されていた可能性がある。

法幢寺に埋葬され墓標を持つ子息女は一六名（二〇％）である。男女別にみると男性二人（七五％）、女性四人（二五％）と男性の割合が高く、家督相続や養子前に死亡した嫡男・二男が半数を占めている。過去帳では男性が二五人（四八％）、女性が二七人（五二％）であり、記載率にほとんど性差がみられなかったのと対照的である。墓標は、別石五輪塔ないし笠塔婆が用いられており、埋葬地と墓標造立地はおおむね一致している。享年をみると、成人前に亡くなった者が過去帳に記載されるようになるのは一七世紀後半以降であり、男児の墓標も同じく一七世紀後半から建てられるのに対し、女児の墓標はやや遅れ、一八世紀前半からであった。子息女の場合、性別や享年によって過去帳への記載・墓標造立の対象になるかどうかや、墓標が建てられはじめる時期にも明確な差があることが認められた。

## ②高野山に墓標を有する者

次に、高野山奥の院の松前藩主家墓所についてみていく。<sup>19)</sup> 高野山に墓標を持つのは、二代公広・三代氏広・四代高広、六世盛広の正室、三代正室、四代正室の六名で、墓標は主に別石五輪塔が採用されている（表5-2）。おおむね一七世紀前半から後半に亡くなった藩主・正室を祀っており、それ以降に死亡した人物や側室および子息女の墓標はない。当墓所では発掘調査が行われておらず、下部構造は不明で

ある。しかし、藩主や正室が高野山へ埋葬された記録はみられないため、遺体が埋葬された本葬墓ではなく、全て遺髪や爪などを収めた分霊墓であると考えられる。<sup>20)</sup> 当墓所では二代公広とその生母から墓標造立が始まっており、公広の石廟造立を契機とする国元法幢寺の松前藩主家墓所と高野山奥の院墓所は、墓所形成時期がほぼ同じであると推察される。

## （3）小括

松前藩主家の「家」成員のうち、過去帳の記載率や墓標保有率に差が認められたのは正室などと子息女であり、当主・藩主は全員が過去帳に記載され、墓標を持っていた。過去帳に記載されていた者と記されなかった者を比較すると、正室・継室という妻としての立場・序列や、継嗣を残せたかという点、子息女の場合は生母が誰かという出自が影響していることが分かった。当主・藩主の正室などや子息女の場合、基本的に埋葬地に建てられること、その埋葬地の選択にあたっては「家」内部の序列にのっとりつつ、個人的な意向も反映されていた可能性があることを明らかにした。また、法幢寺・高野山における松前藩主家墓所は、ともに二代藩主公広の死を契機に形成されており、報告書でも指摘されているように公広治下において藩主権力の集中・強化と家臣団整備が図られたことが背景にあると考えられる。<sup>21)</sup> なお、松前藩主家は文化四年（一八〇七）から文政四年（一八二一）まで梁川へ移封されているが、墓標造立には特に大きな変化はみられなかった。<sup>22)</sup>

### 三、村上系松前家における死者供養

ここでは、松前藩の重臣である村上系松前家を対象として、松前藩主家と同様に誰が過去帳に記され、墓標が建てられているのか検討する。

#### (1) 過去帳の記載率

まず、村上系松前家のうち過去帳に記載されていた者の比率を分析する。ここで対象とするのは基本的に四代広謙以降の当主・妻妾・子供たちなどとし、中世以前ないし近代以降に亡くなっている者や後世に墓標が建てられている者は除外する。なお、没年不明の者は対象に含めた。

系譜に記された村上系松前家の「家」成員は、当主が八名、当主の妻・妾・養母が二〇名、のちに当主となった者を除く子供たち四九名である(表1)。そのうち檀那寺である法源寺の過去帳に記載されていたのは、当主は四代広謙から一代広亮までの七名、妻妾などは八代広長の妾(由利)、一〇代広雅の妻、養母の三名、子供は八代広長の三男広雄から一三代広甫の長女までの二一名であった(表6・8)。妻妾・子供の過去帳記載率が一五・二二%とかなり低い理由は、記載された者とされなかった者の差異に起因するというよりも、過去帳へ記載が始まる時期自体が遅いためであると考えられる。当主は一七世紀後半から記載されるのに対し、妻や子供は一八世紀末以降であり、そのため記載率が低く抑えられている。この点に関しては、後述

する当主の切腹および当主の長期不在という「家」の危機が影響したと考えられる。

#### (2) 墓標を持つ者の特徴

つぎに、過去帳へ戒名が記載され、かつ墓標が造立されている者の特徴についてまとめる。松前藩主家から養子に入り、当家が松前を名乗るようになる四代広謙から過去帳記載や墓標造立がはじまり、墓標は笄塔婆と櫛形が用いられている(表9・図4)。墓標の配置は、区画奥に当主の墓標と、年代不明だが古手の一石五輪塔・一石位牌形が置かれ、区画入口付近に当主の妻妾らと子供たちの墓標が置かれている(図5)。当家の墓地で笄塔婆を採用し、一五〇cm以上の比較的大型の墓標が建てられているのは、ともに松前藩主家からの養子である四代広謙と八代広長のみである。これは藩主の実子という出自が墓標型式や規模に反映されているといえよう。例外は、六代広孝と九代広英であり、広孝に関しては過去帳記載・墓標造立ともになされなかった。これは、広孝が家督相続前に死亡したこと、さらにその子供である七代広行がのちに切腹を命じられ、系譜に「広行無継子以藩主第十一世邦広公之第四男為嗣子、盖依幼君而令家臣赤石紋左衛門吉達守家事、凡十有八年也」とあるように、藩主家からの養子である八代広長が幼少であったため、家督を相続するまでの一八年間家臣に家政が預けられ、当主不在の時期があったことなどが影響している可能性がある。九代広英の墓標が建てられなかった原因については不明である。

表6 村上系松前家 当主一覧

当主 代数	名前	過去帳 記載の 有無	墓標の 有無	父	母	没年月日	戒名	埋葬地	享年 (歳)	備 考
初代	村上政儀			不明	不明	1513.0627	院殿4居士			蝦夷との戦いで自殺
2代	村上季儀			初代政儀	不明	0.0316	院殿4居士			
3代	村上直儀		●	2代季儀	不明	0.0315	院殿4居士			系譜に「明和五年戊子夏追諡建碑于松前山法源寺」とあり、墓標は後世の造立
4代	松前広謀	○	○	2代藩主 松前公広	継室蠣崎守広の女	1678.0830	院殿4居士	法源寺	50	藩主公広の4男だが直儀養子となる、松前氏に改称、家老を務める、系譜に「天保九月一日変死」とあり、実弟の松前幸広と争い殺害される
5代	松前広時	○	○	4代広謀	広謀の妻（下国慶季の女）	1732.0326	院殿4居士	法源寺	81	家老を務める
6代	松前広孝			5代広時	広時の妻（蠣崎利広の女）	1705.0810	院殿4居士	法源寺		系譜に「広孝未継家而卒雖然有継子故載于歷代焉」とあり、家督相続前に死亡したが実子の広行が当主となったため6代とされている
7代	松前広行	○	○	6代広孝	広孝の妻（蠣崎広明の女）	1738.1115	院殿4居士	法源寺	35	家老を務める、ゆえあって切腹を命じられる
8代	松前広長	○	○	6代藩主 松前邦広	継室土橋武則の女	1801.0510	院殿4居士	法源寺	65	藩主邦広の4男だが広行の養子となる、家老を務める
9代	松前広英	○		8代広長	広長の後妻（志村政次の女）	1850.0929	院殿4居士	法源寺	90	家老を務める
10代	松前広雅	○	○	8代広長	広長の妻（蠣崎広重の養女）	1836.0429	院殿4居士	法源寺	58	広英の養子となる、家老を務める
11代	松前広亮	○		9代広英	広英の妾	1839.1015	院殿4居士	法源寺	43	広雅の養子となる、側頭役を務める
12代	松前広休			10代広雅	広雅の妻（下国季武の女）	1874.0516		吉祥寺	66	広亮の養子となる、家老を務める、1872年東京浅草に移住
13代	松前広甫			12代広休	広休の妻（尊念寺至成院広海 の女）					家老を務める

\* 出典「村上系松前家系譜」、「法源寺過去帳」

\* 没年月日は墓標がある場合には墓標の記載を優先し、墓標がない場合は過去帳の記載に従った。

\* 墓標の有無欄で「○」は法源寺に墓標があるもの、「●」は法源寺に墓標があるが後世の造立と推定されるものを示す。

表7 村上系松前家 妻・妾など一覧

配偶者	立場	過去帳 記載の 有無	墓標の 有無	出 自	没年月日	産んだ子供の数	戒名	埋葬地	享年 (歳)	備 考
2代季儀	妾			不明		1男				
3代直儀	妻			松前藩主家4世蠣崎季広 の12女	1631.0303		院殿4 禪定尼	龍雲院		
4代広謀	妻			下国慶季の女	1712.0817	1男	院殿4 沙弥尼			* 5代広時の生母
	妾カ			於佐女の女	1657.0621	1男	院殿4 信女			
5代広時	妻			蠣崎利広の女	1710.0825	3男	4 大姉	法源寺		* 6代広孝の生母
	妾				1747.0426		4 沙弥尼			
6代広孝	妻（即登）			蠣崎広明の女	1705.0817	1男1女	4 大姉	法源寺		* 7代広行の生母
	妻			松前広侯の女		1女				
8代広長	後妻カ			志村政次の女		2男				* 9代広英の生母
	妾（由利）	○	○		1832.0205	2男6女	院殿4 大姉			* 10代広雅の生母
	妾					1男				
9代広英	妾（千恵）			川島雷吉の女		1男1女				
	妾					1男				* 11代広亮の生母
	妾					1男				
	妾					2男				
10代広雅	妻（美満）	○	○	下国季武の女	1842.1020	3男1女	院殿4 大姉	法源寺	60	* 12代広休の生母
11代広亮	妻（麻貞）			蠣崎重郎右衛門の妹、の ち離縁		1女				
	後妻（欣）			佐藤求馬の姉、のち離縁		1男				
	妾（吉）			清水虎市の女		1男				
12代広休	妻（八重）			尊念寺至成院広海の女	1875.1222	5男5女		吉祥寺	60	* 13代広甫の生母
13代広甫	妻（婦美）			尾張藩土谷包文の女		6男5女				
—	妾母	○	○	不明	1834.0225		院殿4 大姉			

\* 出典「村上系松前家系譜」、「法源寺過去帳」

\* 没年月日は墓標がある場合には墓標の記載を優先し、墓標がない場合は過去帳の記載に従った。

\* 墓標の有無欄で「○」は法源寺に墓標があるもの、「●」は法源寺に墓標があるが後世の造立と推定されるものを示す。

表8 村上系松前家 子息女一覧(1)

父	名前	過去帳記載の有無	墓標の有無	生 母	来歴・婚姻など	没年月日	戒名	埋葬地	享年(歳)	備 考
初代 政儀	季儀			不明	2代当主	0.0316	院殿4居士			
2代 季儀	忠儀			季儀の妾						系譜に「明和五年戊子夏追諡建碑于松前山法源寺」とあり、墓標は後世の造立
	直儀		○	不明	3代当主	0.0315	院殿4居士			
3代 直儀	女			不明	初代藩主康広の正室・6世盛広の生母となる	1584.0726	院殿4大姉	法幢寺		
	広謙	○	○	継室蠣崎守広の女	2代藩主公広の4男、直儀養子・4代当主となる	1678.0830	院殿4居士	法源寺	50	藩主公広の4男だが直儀養子となる、松前氏に改称、家老を務める、系譜に「実秋九月一日変死」とあり、実弟の松前幸広と争い殺害される
4代 広謙	広時	○	○	広謙の妻(下国康季の女)	5代当主	1732.0326	院殿4居士	法源寺	81	家老を務める
	徳兵衛			広謙の妾(於佐女)		1670.0429	4信士	龍雲院		
5代 広時	伝五郎			広時の妻(蠣崎利広の女)		1715.0121	4童子			天逝
	女(乙)			不明						天逝
	広孝			広時の妻(蠣崎利広の女)	6代当主	1705.0810	院殿4居士	法源寺		系譜に「広孝末継家而卒雖有継子故載于歷代傳」とあり、家督相続前に死したが実子の広行が当主となったため6代とされている
	政寅			広時の妻(蠣崎利広の女)	松前藩主厚谷政国の養子となる	1704.0218	4信士			
	女			不明	佐藤知季に嫁す	1714.0306	4大姉			
6代 広孝	女			不明	蠣崎広武に嫁す	1730.0003	院殿4大姉			
	女			広孝の妻(蠣崎広明の女)	蠣崎広近に嫁す	1719.0812	院殿4信女	法華寺		
	女(和美)			不明	新井田朝範に嫁す	1768.0715	院殿6大姉	光善寺		
	女(俊)			不明	下国季季に嫁す	1733.1111	院4大姉			
	女(喜)			不明		1704.1118	4童女	法源寺		
7代 広行	広行	○	○	広孝の妻(蠣崎広明の女)	7代当主	1738.1115	院殿4居士	法源寺	35	家老を務める、ゆえあって切腹を命じられる
	広長	○	○	継室土橋武則の女	6代藩主邦広の4男、8代当主となる	1801.0510	院殿4居士	法源寺	65	家老を務める
	男			広長の妾		1755.1114	5童子	経堂寺		
	女(信)			広長の妻(松前広侯の女)	はじめ新井田広友、のち専念寺の養女となる	1773.0605	院	専念寺		
	広英	○		広長の後妻(志村政次女)	9代当主	1850.0929	院殿4居士	法源寺	90	家老を務める
8代 広長	女(千代)			広長の妾(由利)	蠣崎広重の養女となり、下藤多仲に嫁す	1779.0607	院4大姉	龍雲院	17	
	広雄	○	○	広長の後妻(志村政次女)	9代藩主章広の近臣となる	1805.1105	院4居士	法源寺	42	広雅妻は江戸城西丸門番の宮野善右衛門の女、広雅の死後妻子は実家に帰る
	女(春)			広長の妾(由利)	目谷定恒に嫁す	1819.1029	院4大姉	法華寺	55	
	女(順)			広長の妾(由利)	高橋直光に嫁す	1844.0629	院釈尼2	専念寺	78	
	女(房)			広長の妾(由利)	新井田朝忠に嫁す	1843.0125	院殿6大姉	光善寺	74	
	女(直)		○	広長の妾(由利)		1792.0904	4大姉	法源寺	21	
	精雄			広長の妾(由利)	和田氏茂の養子となる	1852.0608	院4居士	龍雲院	78	
	女(安)			広長の妾(由利)	下国季盛に嫁す	1820.0325	院殿4大姉	興国寺	44	
	広雅	○	○	広長の妾(由利)	広英の養子・10代当主となる	1836.0429	院殿4居士	法源寺	58	家老を務める
	男			不明		1782.1226	5童子	経堂寺	天逝	
9代 広英	広恒			広英の妾		1811.0209	院4居士	興国寺	21	
	広亮			広英の妾	広雅の養子・11代当主となる	1839.1015	院殿4居士	法源寺	43	側頭役を務める
	政善	○		広英の妾	はじめ志村為善の養子となるが離縁	1838.1029	院4信士	法源寺		
	定四郎			広英の妾	谷梯茂長の養子となる	1822.0614	院4居士	法源寺		
	女(幾)			広英の妾(川島雷吉の女)	はじめ小川延太郎、のち近藤武明に嫁す					
10代 広雅	則英			広英の妾(川島雷吉の女)	新規に一家を興す、旧幕府軍との戦闘により戦死	1869.0411		根田田村神止山	37	
	長義			広雅の妻(下国季武の女)	廣倉保春の養子となるが離縁、のち新規に一家を興す	1857.1027	院殿4居士	龍雲院	57	
	女(為)	○		広雅の妻(下国季武の女)		1808.0508	4童女	法源寺	天逝	
	広休			広雅の妻(下国季武の女)	広亮の養子・12代当主となる	1874.0516		吉祥寺	66	家老を務める、1872年東京浅草に移住
	政庸			広雅の妻(下国季武の女)	北見政方の養子となる					

表 8 村上系松前家 子息女一覧(2)

父	名前	過去帳 記載の 有無	墓標の 有無	生 母	来歴・婚姻など	没年月日	戒名	埋葬地	享年 (歳)	備 考
11代 広亮	女(久耳)	○	○	広亮の妻(蠣崎重部右衛門の妹)		1832.1122	院 4 童女	法源寺	12	
	亮俊	○		広亮の妾(清水虎市の女)	はじめ藤田陸郎、のち 目谷元次郎の養子とな るが離縁、長州を漫遊 中客死	1858.0518	院 4 居士	法源寺	24	安政六年五月に法源寺へ 「追葬」とある
	親次郎	○	○	広亮の後妻(佐藤求馬の姉)		1840.0504	5 童子	法源寺	2	
12代 広休	女(嘉広)			広休の妻(専念寺至成院広 海の女)	厚谷兵部に嫁す	1875.1222		吉祥寺	60	
	女(尾登)	○	○	広休の妻(専念寺至成院広 海の女)		1833.0310	2 嬰女	法源寺	夭逝	
	広甫			広休の妻(専念寺至成院広 海の女)	13代当主					家老を務める
	千代之進	○	○	広休の妻(専念寺至成院広 海の女)		1841.0829	5 童子	法源寺	夭逝	
	女(道)	○	○	広休の妻(専念寺至成院広 海の女)		1841.0215	3 童女	法源寺	夭逝	
	儀休			広休の妻(専念寺至成院広 海の女)	はじめ松前崇效、のち 柴田元剛の養子となる					
	女(佐登)			広休の妻(専念寺至成院広 海の女)	蠣崎広業に嫁す	1864.0416	院殿 4 大姉	法華寺	21	
	女(登茂)			広休の妻(専念寺至成院広 海の女)	はじめ松前広治、つぎ に青江秀、のち福田伝 兵衛に嫁す					
	元恵			広休の妻(専念寺至成院広 海の女)	柴田元剛の養子となる	1870.0713	院 4 居士	龍雲院	25	
13代 広甫	広澄			広休の妻(専念寺至成院広 海の女)	専念寺至成院広海の養 子となる	1878.0225			31	
	広愛			広甫の妻(谷包文の女)						
	直次郎	○		広甫の妻(谷包文の女)		1859.0128	5 童子	法源寺	3	
	文吾			広甫の妻(谷包文の女)						
	女(喜多)	○	○	広甫の妻(谷包文の女)		1865.0708	4 孩女	法源寺	3	
	豊治			広甫の妻(谷包文の女)	岡本甚蔵の家督を相続	1883.1106		吉祥寺	18	
	女(吉美)			広甫の妻(谷包文の女)	遠矢平吉に嫁すが離縁					
	厳常			広甫の妻(谷包文の女)	専念寺住職の福島広澄 の養子となる					
	英六郎			広甫の妻(谷包文の女)	福原太郎左衛門の養子 となる					
	女(登根)			広甫の妻(谷包文の女)						
	女(猶)			広甫の妻(谷包文の女)		1876.0820		吉祥寺	1	
	女(寿満)			広甫の妻(谷包文の女)	高橋銀次郎の養女となる					
	鉄雄			不明	間部卯之助の養子となる					

\* 出典「村上系松前家系譜」、「法源寺過去帳」。

\* 没年月日は墓標がある場合には墓標の記載を優先し、墓標がない場合は過去帳の記載に従った。

\* 墓標の有無欄で「○」は法源寺に墓標があるもの、●は法源寺に墓標があるが後世の造立と推定されるものを示す。

表 9 法源寺村上系松前家墓所の墓標と被供養者

墓標番号	全高(cm)	型式	没年	戒名	名前	「家」内部での立場	享年(歳)	役職	備 考
源702	119	駒形	1832	院殿 4 大姉	由利	8 代妾	93		墓標に「是第十代広維之實母也名由利女年齢九十有三歳」とあり
源703	102	櫛形	1792	4 大姉	女(直)	8 代 6 女	21		
源704	155	笠塔婆	1801	院殿 4 居士	松前広長	8 代	65	家老	6 代邦広の 4 男だが養子となる
源705	127	櫛形	1842	院殿 4 大姉	下国季武の女(美満)	10 代妻	60		
源706	102	櫛形	1836	院殿 4 居士	松前広雅	10 代	58	家老	
源707	157	笠塔婆	1678	院殿 4 居士	松前広謀	4 代	50	家老	藩主公広の 4 男だが直儀養子となる、松前氏に改称、家老を務める、系譜に「天保九月一日薨死」とあり、弟の松前幸広と争い殺害される
源708	120	櫛形	1732	院殿 4 居士	松前広時	5 代	81	家老	
源709	120	櫛形	1738	院殿 4 居士	松前広行	7 代	35	家老	切腹を命じられる
源710	115	平頭角柱	1834	院殿 4 大姉	—	養母			
源711	75	櫛形	1805	院 4 居士	松前広雄	8 代 3 男	42		9 代藩主章広の近臣として仕える
源712	58	櫛形	1840	5 童子	觀次郎	11 代 3 男	2		
源713	49	丘状頭角柱	1832	院 4 童女	女(久耳)	11 代長女	12		
源714	69	櫛形	1833	2 嬰女	女(尾登)	12 代 2 女	夭逝		
			1841	3 童女	女(道)	12 代 3 女	夭逝		
源715	56	櫛形	1841	5 童子	千代之進	12 代 2 男	夭逝		
源716	48	櫛形	1865	5 孫女	女(嘉多)	13 代長女	3		
源821	・104	駒形		院殿 4 居士	村上直儀	3 代			系譜に「明和五年戊子夏追諡建碑于松前山法源寺」とあり、墓標は後世の造立

\* 参考史料「松前村上系譜」、「法源寺過去帳」。  
\* 全高に欠損のある場合は( ) で示している。



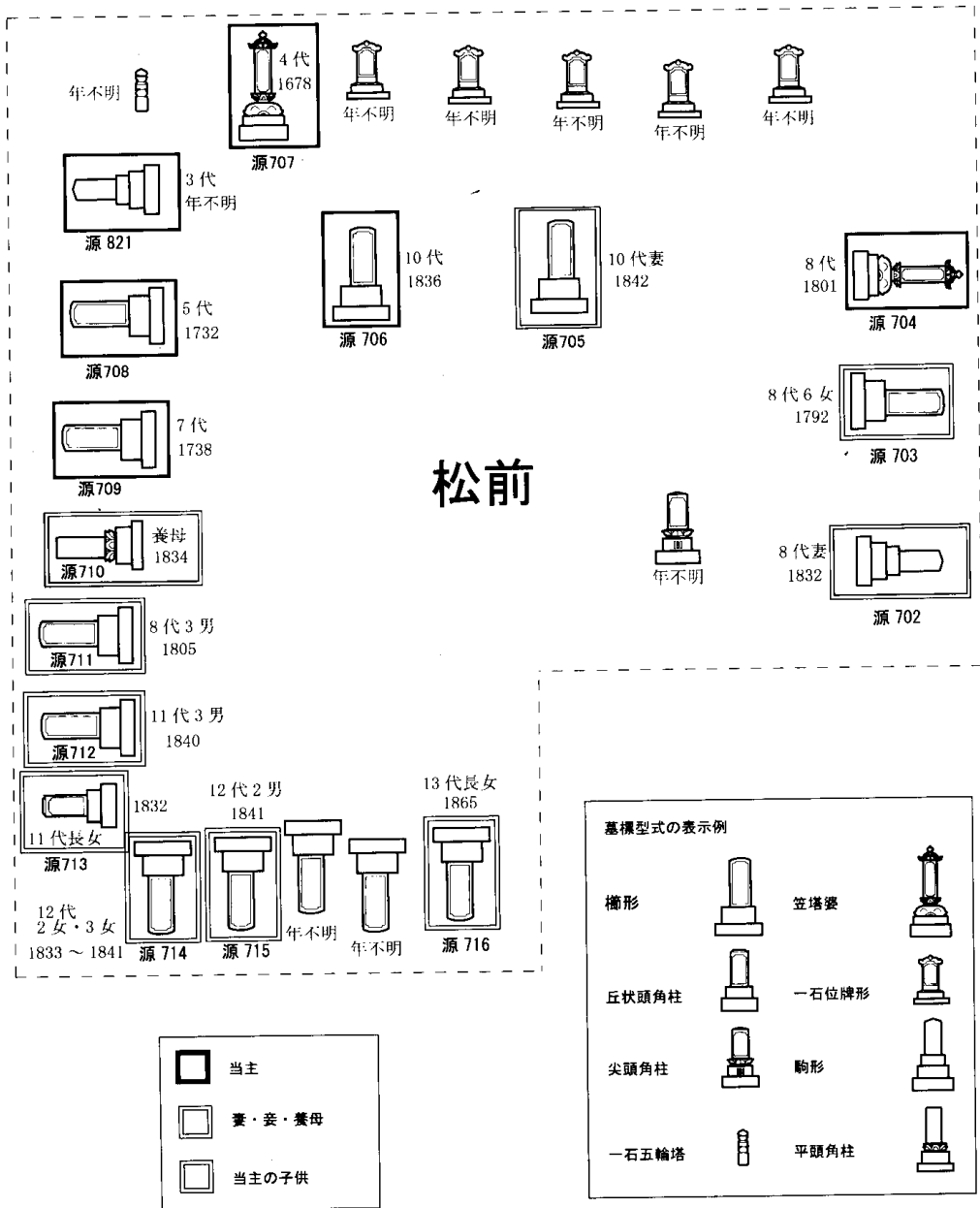


図5 法源寺南区Ⅰにおける村上系松前家墓所の墓標配置



表10 家ごとにみた墓標保有者数の変遷

	墓標を持つ者													計(名)
	当主			当主の妻妾など			当主の子供			その他・不明				
	17世紀	18世紀	19世紀	17世紀	18世紀	19世紀	17世紀	18世紀	19世紀	17世紀	18世紀	19世紀	不明	
松前藩主家	3	3	5	4	3	4	2	10	4	1			2	41
村上系松前家	1	2	2			3		1	7					16
正広系蠣崎家	2	2	3		3	2	2	4	2	1	10	4	4	39
守広系蠣崎家	3	3		2	1	1		5			2	6	2	25
次広系蠣崎家	1	3	2		3	4		5		2		2	5	27

\* 正広系蠣崎家・次広系蠣崎家・守広系蠣崎家のデータは報告書に基づく。  
 \* 正広系蠣崎家・次広系蠣崎家・守広系蠣崎家は系譜類が現存しないため、当主や妻妾などといった「家」内部での立場は過去帳と戒名から推定した。  
 \* 「その他・不明」は過去帳と照合できなかったため、「家」内部での立場に関する情報を欠く者である。

当主の妻妾などが過去帳に記され、墓標を建ててもらえるようになるのは八代広長の妾が死亡した一八三〇年代以降であり、当主に比べ約一五〇年ものひらきがある。墓標は駒形、平頭角柱、櫛形が用いら

れている。妻妾などの場合、過去帳に記された三名全員が墓標を持っていた。八代広長の妾（由利）、一〇代広雅の妻は男女合わせて四人以上の子供を産んでいる。数少ない事例ではあるが、妻・妾といった「家」内部での立場や当主の生母であるかということよりも、産んだ子供の数が多いほど供養の対象となりやすい傾向が認められた。

当主の子供は一七九〇年代以降、墓標に祀られるようになっていく。採用されている墓標型式は、全高平均が五七c mの櫛形ないし丘状頭角柱であり、当主や妻らと比較してかなり小ぶりの墓標が建てられている。享年をみると、二〇歳以下で亡くなった者が六名おり、幼少のう

ちに死亡している者が多い。ただし、はじめに墓標が建てられているのは一定以上の年齢に達した者（八代三男の広雄・享年四二歳、同五女の直・二一歳）であり、これらに遅れて二〇歳以下で死亡した子供たちの墓標が建てられるようになっていく。なお、当家では養子・婚出後に亡くなっている人物は過去帳に記されず、墓標も建てられていない。墓標を持つ八名の性別をみると、男性が三名（三八％）、女性が五名（六三％）であり、女性の方が多い傾向がみられた。

### （3）小括

村上系松前家は、当主の切腹や当主の長期間の不在という「家」存続の危機を経験しているためか、系譜上は当主とされていても過去帳に記されず墓標を持たない事例がみられた。当主の妻妾や子供たちについて、過去帳記載率が約二割程度と低く、墓標が建てられるようになる時期も当主に比べてかなり遅れることが明らかになった。また、過去帳記載と墓標保有の関係を見ると、過去帳に戒名が記載されていればおおむね墓標を持つといえる。

## 四、松前藩主家・村上系松前家ならびに他の松前藩士家との比較

ここでは、松前藩主家・村上系松前家と、他の松前藩士家も加えて比較を行い、「家」内部における墓標を持つ者と持たざる者の違いについて述べたい。

過去帳への記載と墓標保有の実態をみると、両家に共通する基礎的事項として当主―当主の妻妾（①妻②当主生母となった妾、子供を多数出産した妾③その他の妾）―当主の子供（①嫡男および二男②それ以外の男子③女子）の順で記載率・保有率が低くなり、基本的には当主とその妻を中心に供養が行われている。当主およびその妻らを中心とする祭祀の在り方は、墓地区画の奥中央に当主や妻の墓標が置かれ、区画入口付近に子供やその他の「家」成員の墓標が置かれるという家毎の墓地区画をみても明らかであり、「家」内部の秩序が視覚的に表現されている。なお、今回、後世に建てられた墓標は考察から除外しているが、中世に亡くなった人物のうち、「家」の始祖に相当する当主およびその妻の墓標が建てられていることが多く、墓地区画の中でも奥中央などの重要な位置に置かれている。誰を祀り、墓標を墓地区画のどこに配置するかという点でも「家」内部の秩序や「家」意識が現れているといえる。そして、当主の子供は基本的に養子・婚出前に死亡した者が対象となり、成人した者に比べ年少者の供養が始まる時期が若干遅れることがあげられる。

誰が供養の対象となるかは、先にも述べたように「家」内部の序列に左右される部分が大きいといえよう。しかし、本来ならば供養の対象から外れるような人物であっても、藩主の実父・生母になる、または子供を多数出産するという条件を満たせば過去帳に記され、墓標が建てられている。出自の問題もさることながら、子を残して「家」の存続に貢献できたかという個別的な事情によって供養の対象範囲は拡大され、適用されたものと考えられる。

相違点として、近世を通じて安定して墓標を建てている松前藩主家に比べ、村上系松前家では全体的に墓標の造立が近世後期まで低調であることがあげられる。村上系松前家と同じく松前藩の有力家臣である正広系蠣崎家・守広系蠣崎家・次広系蠣崎家の墓所では、当主の墓標は松前藩主家の藩主墓標とほぼ同時期に建てられ、妻や子供の墓標が建てられるのはそれよりもやや遅れる傾向がある（表10）。その中でも守広系蠣崎家は、近世初期に松前でいち早く石廟を取り入れた家の一つである。守広の子蠣崎友広は幼少の藩主が続いた一七世紀中頃、藩主の義父・家老として藩政の実権を握り、墓標も藩主家に準ずる規模の石廟を採用していた<sup>(26)</sup>。しかし、天明元年（一七八一）に知行が没収され、その後の墓標造立は下火となっており、村上系松前家と同様に重臣層といえども「家」の危機に際して墓標を建てられない状況がしばしば起こっていたことが分かる。これらの点は、大名家とそれに仕える上級武家という社会階層の違いによるものということができるだろう。

## 結語

最後に、本論で明らかにできたことを簡単にまとめた上で今後の課題について述べ、擲筆としたい。

松前藩主家と村上系松前家の比較から、供養の対象となるのは「家」の始祖を含む当主や妻を中心とする「家」成員であり、基本的には「家」内部の序列に左右される部分が大きいことが明らかになった。それ

は、墓所の奥中央に当主や妻の墓標が置かれ、入口付近に子供やその他の「家」成員の墓標が置かれるという藩主家や重臣層の墓所の空間構成からも明白である。誰を祀り、墓標を墓地区画のどこに配置するかという点でも「家」内部の秩序や「家」意識が現れているといえる。供養の対象となっている人物を詳細に検討すると、本来ならば供養の対象から外れるような人物であっても、藩主の実父・生母になる、または子供を多数出産するという条件を満たせば過去帳に記され、墓標を建てられている。出自の問題もさることながら、子を残して「家」の存続に貢献できたかという個別的な事情によって供養の対象範囲は拡大され、適用されたものと考えられる。墓所の造営状況を見ると、松前藩主家では近世を通じて安定的に墓標を建てているのに比べ、村上系松前家など重臣層の墓所では「家」の危機に際して墓標を建てられない状況がしばしば起こっていた。この点は、大名家とそれに仕える上級武家という社会階層の違いによるものといえることができるだろう。

今後の課題として、以下の三点について指摘したい。養子・婚姻後に死亡した当主・藩主の子供を含む「松前家御過去帳写」の作成目的や、これが実際の祭祀行事の場でどのような使われ方をしたのかについては、本論で十分な検討を行うことができなかった。他の大名家の事例も分析しながら、今後検討を加えていきたいと思う。

大名墓を考えるにあたり、高野山奥の院における大名墓の実態をより明らかにしていく必要があると考える。それぞれの国元の墓所については、各地で改修工事などに伴う発掘調査が行われ、成果報告も増

えている。<sup>(28)</sup>しかし、高野山の大名墓では、墓標の悉皆調査や発掘調査が行われた事例は少なく、そもそも奥の院に何基の大名墓があるのかすら判然としない状況にある。数千基を超える大量の墓標があると予想されるため、個人による調査ではなく、大学などの研究機関や自治体による組織的調査が望まれる。霊場としての高野山を論じる上でも、戦国大名墓を含めた高野山奥の院大名墓の様相を明らかにするべきであると考ええる。

今回の分析では、「家」成員のうちで誰が供養の対象となるのかを明らかにするため、系譜類と過去帳・墓標から検討を加えた。この三資料が全て揃う「家」は非常に少なく、検討できたのは松前藩主家と村上系松前家の二家のみにとどまった。取り上げた事例が大名家と重臣層のみであったため、階層的な偏りがあることは否めない。近世の家内秩序や「家」意識に関する議論を深めるためには、武家以外の町人・百姓などの在り方にも目を配る必要性があるだろう。

## 註

- (1) 新谷尚紀『生と死の民俗史』（木耳社、一九八六）、主室文雄『葬式と檀家』（吉川弘文館、一九九九）。
- (2) 西木浩一『江戸の葬送幕制』都史紀要三七（東京都公文書館、一九九九）。
- (3) 菊池勇夫『飢饉から読む近世社会』（校倉書房、二〇〇三）、関根達人『津軽の飢饉供養塔』（弘前大学人文学部文化財論ゼミナール、二〇〇四）、同編『下北・南部の飢饉供養塔』（弘前大学人文学部文化財論ゼミナール、二〇〇五）。
- (4) 考古学的手法に基づく近世墓標の悉皆調査は、中川成夫『平泉における近世墓地・石塔類の調査』（『Mousaion』14、一九六八）、長沢利明『近世石造墓塔の歴史の変

- 化——東京都西多摩郡檜原村笛吹地区の調査——」(『日本民俗学』116、一九七八)など、村落を対象にした個人レベルの調査が多かった。近年では、時津裕子「近世墓にみる階層性——筑前秋月城下の事例から——」(『日本考古学』九、二〇〇〇)、金沢市編『野田山墓地』金沢市文化財紀要二〇〇(金沢市埋蔵文化財センター、二〇〇二)のように城下町の寺院墓地を対象とするものや、高崎市市史編さん委員会編『新編 高崎市史』資料編13 近世石造物墓石編、二〇〇三、白石太一郎・村木二郎編『国立歴史民俗博物館研究報告』一一一(国立歴史民俗博物館、二〇〇四)など大学・地方自治体が主体となった大規模な調査も行われるようになった。
- (5) 坪井良平「山城木津惣墓墓標の研究」(『考古学』一〇一六、一九三九)、竹田聰洲『民俗信仰と祖先信仰』(国書刊行会、一九六六)、大藤修『近世農民と家・村・国家——生活史・社会史の視座から——』(吉川弘文館、一九九六)。
- (6) 田中藤司「死を記念する／記念しなす——農村家族史のなかの位牌・墓標史料」(『民衆史研究』七三、二〇〇七)、関根達人「近世墓標に現れた自己意識——松前藩の事例分析に基づいて——」(『歴史』一一二、二〇〇九)、朽木量「近世墓標研究の成果と総合的な墓制研究への期待」(『墓制・墓標研究の再構築——歴史・考古学・民俗学の現場から——』岩田書院、二〇一〇)、渡部圭「モノと精神史のあいだ——石塔史料論の自立をめざして——」(『墓制・墓標研究の再構築——歴史・考古学・民俗学の現場から——』岩田書院、二〇一〇)。
- (7) 鈴木尚・矢島恭介・山辺知行編『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』(東京大学出版会、一九六七)、伊東信雄編『瑞鳳殿伊達政宗の墓とその遺品』(財団法人瑞鳳殿、一九七九)、伊東信雄編『感仙殿伊達忠宗・善応殿伊達綱宗の墓とその遺品』(財団法人瑞鳳殿、一九八五)、鈴木公雄編『長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書』(港区教育委員会、一九八六)、谷川章雄「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」(『墓と葬送の江戸時代』吉川弘文館、二〇〇四)。
- (8) 関根達人編『平成一九年度～二二年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書』(弘前大学文化財論ゼミナール、二〇一〇)。
- (9) 新井田千里、明治二年(一八七八)筆『松前町史』史料編第一巻所収、一九七四。筆者の新井田は近世期、松前藩儒臣であった。なお、合わせて『新訂 寛政重修諸家譜』3(統群書類従完成会、一九六四)も参照した。
- (10) 松前町史編集室所蔵マイクロフィルム紙焼きを使用。「法幢寺松前藩主家過去帳」は全一一冊現存する法幢寺過去帳のうちの二冊であり、他の法幢寺檀家の過去帳とは別冊になっている。

# 近世墓標・過去帳・系譜類にみる武家の家内秩序と「家」意識

- (11) 奥平家旧蔵文書、松前町史編集室所蔵マイクロフィルム紙焼き。奥平家は町吟味役などを務めた家柄であるが、なぜ当家に松前藩主家の過去帳が伝わっていたのか詳細は不明である。
- (12) 子息女以外で「松前家御過去帳写」にのみ記載されていたのは、六代藩主邦広の実父にあたる松前本広とその妻の二名である。
- (13) 吉祥寺に現存する松前藩主家の墓標は、三代藩主氏広、八代道広、一〇代良広、九代章広の側室崎崎氏、同秋野氏、一二代昌広の側室山崎氏、五代矩広の二男富広、八代の四女・五女・六女、九代の三男久之助・六女・八女、一二代の二男繩之助、一三代徳広の二男敬広を祀った計一五基であり、吉祥寺に埋葬された全員分の墓標があることになる。
- (14) 松前町史編集室所蔵マイクロフィルム紙焼きの「松前家墓地見取図」(明治三二年(一八九九)写、中嶋家旧蔵文書)・「明治三二年一月松前家墓地碑銘調」では、龍雲院ならびに光善寺から移された二代公広正室と六代正室のものと思われる墓標が確認できる。しかし、現存する墓標の刻字が鮮明であるにもかかわらず「明治三二年一月松前家墓地碑銘調」には「文字明瞭ナラズ」とあること、見取図には現在墓標が置かれている場所からかなり離れた位置に描かれていること、墓標型式・石材や風化程度から判断して近世期に建てられた墓標であるとは考えにくいため、現在法幢寺にある二名の墓標は明治三二年以降に再建されたものと考えられる。
- (15) 松前町史編集室所蔵マイクロフィルム紙焼き。
- (16) 松前町史編集室所蔵マイクロフィルム紙焼き。村上系松前家は他の法源寺檀家とともに過去帳に記載されている。法源寺過去帳は全六冊現存し、元和二年(六一六)から慶応四年(一八六八)までに亡くなった者が記されている。
- (17) 本文中では松前藩主家の当主は、中世以前の蠣崎季繁から蠣崎季広までを「〇世当主」とし、松前慶広以降を「〇代藩主」と表記した。分類に際して、始祖武田信広の義父蠣崎季繁や六代邦広の実父松前本広(分家・幕臣、一〇代・一二代の実父松前見広は「当主・藩主」とし、邦広生母である本広の妻と見広側室は「正室・側室」とした)。
- (18) 松前城下の石廟について報告書(前掲註8)にその詳細が述べられている。松前では松前藩主家に加えて重臣層を中心に武家の墓に越前式石廟が採用されており、北陸地方で石廟の造営が下火になる一八世紀以降も石廟が営まれ続ける。
- (19) 高野山奥の院で松前藩主家墓所とされている区画には、松前藩主家の墓標のほか、仙台藩伊達家に仕えた分家の仙台松前家や、下国家や蠣崎家などの重臣層、松

前城下の町人が施主となっている墓標がみられた。

- (20) 高野山奥の院の大名墓に関する考古学的調査として、墓標の改修工事とともに発掘調査が行われた津軽家墓所の事例があげられる(岡本桂典・井上雅孝編『旧弘前藩主津軽家墓所石塔修復調査報告』遍照尊院、一九八八)。この調査では、地中から遺髪の入った陶製の甕が出土しており、分霊に際して遺骨・遺髪など遺体の一部が用いられていたことが指摘されている。

- (21) 註(8)。

- (22) 梁川移封後の松前藩主家と法幢寺の関係は松前藩士の日記から窺い知ることができる。「和田家諸用記録」の文化六年(一八〇九)六月七日条をみると、和田義維が藩主代参として法幢寺に金七両と回向料一両を納めたことが分かる(『松前町史』史料編2、一九七七)。

同七日 御用之間江御暇乞罷出候処、道中通判外二寺社江之御寄付料猶又法幢寺・光善寺江御口上書御渡被成、御用番松前左膳殿御達有之  
一、法幢寺江之御口上書左ニ記ス

#### 法幢寺

#### 一、金 七両

右之通向後被成御寄附候、猶又 御廟所為御代拝年々御家来被差遣候間可被得其意候、且為御回向料外ニ金壹両被成御備候、尤御歴代之内重キ御年忌御相当之節者前年以辛便被申達候様致度候事

#### (後略)

- (23) 村上系松前家墓所には年代不明の一石位牌形五基と一石五輪塔一基が存在する。一石位牌形は石質が比較的脆い笏谷石ないし火山礫凝灰岩が使用されているため、墓標表面の剥落が著しく年号の判読ができなかった。年号が判読できた他の一石位牌形は、主に一七世紀から一八世紀前半に集中しており、村上系松前家墓所の五基も風化程度や細部の装飾から総合的に判断して一七世紀に建てられたとみてよいだろう。

- (24) 系譜には「同(※筆者による補足―元文)三年戊午冬十一月十五日因于 君命切腹」とあるのみで、藩政史料である「福山秘府」(『新撰北海道史』、一九三六)などにも広行切腹の理由は記されていない。

- (25) この三家は、近世初期の家臣団編成に際して初代藩主慶広が自らの弟達を家臣化していく過程で創設された家である。正広系蠣崎家は松前藩主家四世の季広五男、守広系蠣崎家は同一男を祖とし、次広系蠣崎家は同九男の吉広系蠣崎家の分家に

あたる(『松前町史』通史編1、一九八四)。

- (26) 註(8)。

- (27) 守広系蠣崎家の七代広重は、飛騨屋久兵衛の公訴事件に際して天明元年(一七八二)に有罪となり、子の広房は知行没収・家名断絶とされた。その後、文政五年(一八二二)の松前復領に際して家名再興が許されている(『松前町史』通史編1、一九八四)。

- (28) 「特集 近世大名墓所の調査Ⅰ・Ⅱ」(『考古学ジャーナル』五八九・五九五、ニユーサイエンス社、二〇〇九・二〇一〇)、坂詰秀一監修『近世大名墓所要覧』(ニユーサイエンス社、二〇一〇)。